

きっとできる

「行ってきます。」

小学生の尚子は、お父さんとお兄ちゃんの三人で、元気よくジョギングに出かける。見送ってくれるお母さんにえがおで手をふって走りだした。

しばらくすると、道の向こうの方から、泣き声が聞こえてくる。尚子だ。お父さんとお兄ちゃんは、小さな尚子がおくれても全く気にせず、どんどん先に行ってしまうので、尚子は、くやしがつて、泣きながら追いかける。そんなに泣くなら、いっしょに走らなければいいのだが、次はまた、うれしそうに走りに出かけるのである。この小さな女の子が、将来、オリンピックに出場することになると、だれが思っただろう。

尚子は、高校生になると、いろいろな大会の長距離の代表選手に選ばれた。しかし、出場してみると四十七人中、四十五位だったり、予選落ちだったり、尚子より速い選手はたくさんいた。

大学生になって陸上競技長距離のテレビ中継を見ている、画面にうつる人たちはみんな、びっくりするくらい速かった。尚子は、ため息をつきながら、ごろんとねころんだ。

（自分はどんな選手になりたいんだろう。何を目標にして走っているんだろう・・・。）と、毎日考えていた。

尚子が毎日練習で走る道には、出会いがいっぱいだ。

「こんにちは、つぼみが開いたね。きれいだよ。」

尚子は道ばたの草花に立ち止まって話しかけ、ほほえむ。

そしてまた走り出す尚子に吹く風は、「春から夏になるよ」と季節のうつり変わりを伝えてくれる。土のにおい、日差しの色。尚子は、いつの間にか自分が風になったように走りぬける。

（小さいころから、そう、くやしくて泣きながら走っていたあのころから、ずっとそうだ。わたしは、走ることが好きで好きでたまらなかったんだ・・・。）

ある日、走りながら気が付いた。

（人と戦うんじゃない、自分の記録と戦うんだ。）

それからというもの、毎日、がんばれば手が届く小さな目標を立ててそれを達成していくことにした。

長い階段を一気に駆け上がろうとすれば、途中でばてる。時間がかかっても、一段ずつしっかり登っていけば、上まで登り切れる。

尚子は、そういう気持ちで練習した。大学の門は、夜八時に閉まる。七時まで走って、その後、部屋に入って筋力をつけるトレーニングを毎日行った。いつも一人で、八時ぎりぎりまで練習していたら「ハチコさん」と呼ばれるようになってしまった。昨日の自分の新記録を、今日、自分で破るという、自分への挑戦が続いた。つらい時は自分を励まし、できたときは自分に拍手を送った。

(がんばれば、きっとできる。)

こうして尚子は、自分の記録をのばしていった。

その後、尚子は、強いマラソン選手を育てることで有名な小出かんとくのもとでさらに練習を続けた。そして、努力と熱意で、オリンピックへの舞台へと駆け上がっていくのである。苦しくつらい練習を乗り越え、がんばることができたのは、あの日、自分で見つけた答えのおかげだった。

二〇〇〇年、シドニーオリンピック。世界の有名選手とのマラソンレース。レースの後半は、尚子とルーマニアのシモン選手の二人の金メダル争いとなっていた。

そんな中でも、尚子はシドニーの風を感じ、走ることを楽しんでいた。沿道でお父さんのすがたを見つけた尚子は、かけていたサングラスをお父さんに向かって投げた。それと同時に、シモン選手をぐんぐん引きはなすラストスパートをかけたのである。

大歓声の中、尚子は優勝のゴールテープを切った。

こうして世界中の人の感動とともに、日本人女性として初のマラソン金メダリスト「高橋尚子」が誕生したのである。